

月刊

2016

3  
月号

# みんぱく

特集

アート

の境界



アートの境界面としての美術館 水沢勉

ふたつの「用」の向こうに 鞍田崇

わたしはアーティスト 緒方しるべ

植物画の境界 村山誠

ファッションとアートをめぐる問い 蘆田裕史

# 花を求めて

世界の植物園の中心的存在である英国王立キュー植物園で高山植物を学ぶため一年間留学をしたのは一九七二年。そこで栽培や発芽適温調査を行った植物のひとつにメコノプシス「青いケシの仲間」があった。

日本では一九九〇年に大阪で開催された「国際花と緑の博覧会」で一躍有名になり、現在も咲くやこの花館では周年開花に努めている。この博覧会まではヒマラヤ登山家などが目にして「幻の花」に近かった。留学を終える頃、同時期に留学をしていたヒマラヤの友を訪ねるユーラシア横断の旅を計画した。

中古キャンパーでまず目指したのはスコットランドのベティ・シェリフさん。彼女はご主人で植物学者のジョージさんと共にシツキム、ブータン、チベットの植物調査を行い、ヒマラヤの植物を一九三七年からイギリスで広められた第一人者であった。ジョージさんはブータンシボリアゲハの発見者でもあった。こんな夫妻の庭はブータン奥地の青いケシの仲間が咲き乱れ、夢のような世界であり、現地に向かうプレリユードと思えた。

その後、北欧、中欧、南欧、アジアに入りトルコ、イラン、アフガニスタンのヒンドウクシユ、パキスタン、カシミール、インド、ネパール、シツキムへと向かった。ネパールの王立ゴダヴァリ植物園を訪ねると、キュー植物園所属のグレイ・ウィルソンさんがランドローバーに植物標本を満載にしてイギリスに戻る

## 久山 敦

プロフィール  
1947年兵庫県生まれ。大阪市・咲くやこの花館館長。関西学院大学英文科卒業。英国王立キュー植物園留学を経て、淡路ファームパークの設計・管理を担当。1990年の国際花と緑の博覧会計画時より、咲くやこの花館の運営に携わる。野草探索のために訪れた国、51カ国。著書に『ヨーロッパ花の旅』（創文社）『ヒマラヤの青いケシ』（東方出版）など。

とところに遭遇した。今では青いケシ分類の頂点に立つ専門家である。

また、シツキムに近いカリンポンではランの研究家ウダイ・プラダさん宅を基地にヒマラヤ山中を訪れた。青いケシの仲間で高さが二メートルにもなるメコノプシス・ナパウレンシスが、一〇月というのに黄色の花を残し、プリムラ・カピタータは良い香りの紫の花で迎えてくれた。

東方を目指すのが、当時のビルマは通行困難な故にカルカッタ（現在コルカタ）で車を神戸に向かう船に積む。二万四〇〇〇キロを無事通過してきた。

この半年に及ぶ陸路の旅で、点ではなく線で植物を観察できたのはその後の三つの植物園の立ち上げや管理に大層役立ち人生をも変えた。また四〇数年を経て、カリンポンの友からはウコンユリなどヒマラヤの植物が届き、咲くやこの花館で入館者に見て頂ける繋がりも有り難い。

そして、欧州から東洋、日本を目指すすと、植物が次第に日本に近づいているの知らせてくれる。五感に訴えるものが故郷の近いことを教えてくれ、何物にも代え難い喜びと安心感を覚えたものである。

今一度その道をたどって植物調査を縁で行いたいのが、以前以上に危険で難しい地域が含まれ、頭を過るのはその地の人たちのこと、一刻も早く平和な環境になることを祈りたい。

## 月刊 みんなぱく

3月号目次

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文<br/>花を求めて<br/>久山 敦</p> <p><b>特集 アートの境界</b></p> <p>2 アートの境界面としての美術館<br/>水沢 勉</p> <p>4 ふたつの「用」の向こうに<br/>鞍田 崇</p> <p>5 わたしはアーティスト<br/>緒方 しらべ</p> <p>7 植物画の境界<br/>村山 誠</p> <p>9 ファッションとアートをめぐる問い<br/>蘆田 裕史</p> <p>10 〇〇してみました世界のフィールド<br/>「ケンカ」のすすめ<br/>朝倉 敏夫</p> <p>12 みんなぱく Information</p> | <p>14 味の根っこ<br/>サンバル<br/>杉本 良男</p> <p>16 文化遺産おもてうら<br/>文化遺産の「拡張」<br/>——サンティアゴ巡礼路に描かれた矢印<br/>土井 清美</p> <p>18 音の居場所<br/>孤高の歌姫<br/>——トルコのアレヴィーとして<br/>米山 知子</p> <p>20 人間学のキーワード<br/>グローバルヘルス<br/>浜田 明範</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|



# 「アート」の境界

「アート」と「アートでないもの」の境界はどこにあるのか。その境界や、境界の上にあるものを見ていくことで、西洋美術からくる「アート」の概念を再考する。

## アートの境界面としての美術館

みずさわ つとむ 水沢 勉 神奈川県立近代美術館長

### アートの条件

「人間がもつともすばらしい姿でみえる場所は？」という質問があったとする。わたしは、こう答えるはずだ。「アートのそばです」。そして、すぐにこう付け加えるだろう。「そのひとがそのアートを理解できているときです」と。そうでない場合、そのひとがいかに美しいひとであったとしても、それはアートのお飾りでしかない。「それではアートとは？」と重ねて質問されるにちがいない。わたしは「それを味わっているひとがすばらしい姿でみえるもの」と答えると思う。それでは堂々巡りになってしまい、まったく定義にはなっていないという不満の声がすぐにでも聞こえてきそうだ。

しかし、アートは、きわめて人間的な現象であり、それを五感すべてで感じ、味わう鑑賞者という同伴者がいなければ成立しないのである。つまり、こう言いかえることもできる。

アート自体ということは無意味であり、それを味わう人間の存在が成立の条件である。それはその成立そのものにその外部との関係が前提されているのである。そうした関係的な状況が前提としてあらかじめ条件づけられているために、アートは、きわめて現象的であることを最初から運命づけられている。

### 「箱」に収められるべきもの

こういう笑い話がある。近代ガラス展の企画をしていた美術館

困に笑いを誘わずにはおかない。

### 人間臭い現象

ヴァルター・ベンヤミンが「複製技術時代の芸術」(一九三六年)で指摘したとおり、わたしたちは、二〇世紀前半に「アート」に「礼拝価値」ではなく「展示価値」を認めるようになった。ということは、展示する空間が重要になるということでもある。その序列の最高位にやがて「近代美術館」が位置することになる。

それを逆転させれば、美術館的な空間に展示さえすれば、すくなくとも理論的にはすべてが「アート」と足りえるということでもある。その古典的な実例がマルセル・デュシャンの《泉》一九一七年である。

「アート」を「境界」づける機能を美術

の学芸員が、あるガラス会社のコレクションを借用に伺ったときのことである。なかなか最終リストが決まらず、その会社のほうから提案されたものを展示するという話に最後にまとまった。

その学芸員は、どんな形状の作品であっても、すぐに梱包できるように、ベテランの美術品輸送の専門スタッフを同道した。「こちらです」と、受付の女性に案内された部屋のテーブルには、圧倒的な存在感のガラスの器がひとつ、その中央にどんと置かれている。先輩学芸員は作業員に目配せをする。するとかれは部屋の隅で段ボールを手際よく、加工して、そのガラス器がびったり入る「箱」をあっという間に作ってしまう。

しばらくすると会社の担当の窓口の男性が部屋にすがたを現す。先輩は、「今回はありがとうございます。それでは早速ですが、お借りいたします。そう言っただけ、白手袋をした作業員に受け取りを指示する。

会社の男性は、驚き、おぞおぞと「あ、あの……それは灰皿です」という。

実用品であった灰皿が美術館の借用という行為によって知らぬ間にアートに格上げされていたことが露見した瞬間である。予想外という状況の突然の反転が周囲という存在は備えている。それはいとも簡単に硬直化し、権威化する危険にも晒されている。だからこそ、デュシャンのアナーキズム的なダダの揺さぶりが有効なのだ。

ただし、それさえも成立させているのは、人間との関係においてであり、この「現象」はきわめて人間臭いものなのだ。その「人間」を限りなく、広く、多様に開かれた状態で理解し、他者にたいして寛容で、排除の論理の希薄なものへと絶え間なく「人間」を変化させていくこと。つまりの「アートの境界」を多孔的で、柔らかく、変幻自在で、結ばれると同時に解かれるような流動の状態へと洗練させ、熟成させていくこと。それこそが、二二世紀はじめに生きる、現在のわたしたちが、「美術館」に関して求められている、未来への可能性ではなからうか。



エル・アナツイ《大地の皮膚》2008年  
2010/11年に国立民族学博物館から神奈川県立近代美術館の葉山館に巡回した「エル・アナツイのアフリカ」展の葉山会場風景。廃品の集合体が美術館の空間でみごとに「アート」に変貌する。撮影・筆者、2011年



マルセル・デュシャン《泉》1917年

# ふたつの「用」の向こうに

くらた ながし 鞍田 崇 明治大学准教授



作用的なOUTBOUND(左)と機能的なRoundabout(右:写真は旧店舗)。両者は、手紙と日記の違いにもたとえられる。あくまで生活のひとコマという点では同じでもあるから(撮影・小林和人)

「心になさう」もの

民藝はアートですか？

数年前に編著として刊行した『民藝』のLESSON(二〇二二)という本のなかで、この設問を投げかけたことがある。

答えてくれたのは、南山大学の濱田琢司さんである。柳宗悦が民藝に託した「用」と美の関係について、見開き二頁のわずかな紙数のなかで、要点をしぼりじつに的確に回答してくださっている。興味のある方は、ぜひ参照いただきたい。

ところで、この回答の末尾にこんなくだりがある。

ここでの「用」というのは、単に機能的であるとか、使いやすいものであるということの意味するのではないと思います。「…」柳は、民藝の「用」とは、「心になさう」ものでもなければならぬとも言っています「…」

いまさらながらに大事な指摘をしてくださっていると感じ入った。編著でありながら、刊行当時それほど気にしていなかった自分が恥ずかしくなる。

民藝が従来のアートに抗して機能性に依拠した美的領域を切り開いたことは間違いない。その限りでは、民藝とアートの境界は「用」という視点の有無にある。ただし、これは別に民藝の専売特許ではない。デザインの世界で、たえず問われてきたことである。ということは、「用」は、何も民藝だけでなく、デザインとアートの境界でもあるといえる。

だが、濱田さんが指摘するように、民藝の「用」は機能性のみを意味するわけではない。「心になさう」ものでもある。ここで浮上するのは、逆に、民藝とデザインの境界である。しかしながら、何が物が心に響くということ、これはこれで民藝の特権ではない。アートとは、わたしたちにそうした経験をもたらすものといってよい。となると、「心になさう」は民藝とアートの接点であり、その限りにおいて、アートとデザインの境界でもあることになる。

ふたつの「用」

民藝にはふたつの「用」がある。アートと区別し、デザインとつながる機能性としての「用」。デザインと区別し、アートと通じる「心になさう」を意味する「用」。ふたつの「用」を知らしめたのが民藝の意義である。それがいまあらためて注目を集めている。

「機能」と「作用」は、東京・吉祥寺で日用品店をいとなむ小林和人さんがかねてより口にしていくフレーズだ。機能とは「目に見える具体的な」もので、作用とは「目に見えない抽象的な」ものとする。「『生活工芸』の時代(二〇一四)。両者は経営する二店舗(RoundaboutとOUTBOUND)の違いを説明しようとして思いついた、と小林さんはいう。民藝を説明しようとしてではない。だが、彼もまた民藝に共感を寄せる新しい世代である。ふたつの「用」を見極めようとするまなざしがその共感にも通底していると僕は思う。

愛着といとおしさと

柳宗理が若い世代に見直され、同じく工業デザイナーの深澤直人さんが日本民藝館の館長に就任し、ここへきて民藝特集を組んだ雑誌などでは、折に触れ、民藝とデザインの関係が論じられる。「民藝はデザインですか？」という月刊誌『カーサブルータス』(二〇二三年一月号)の問いかけに、深澤さんは「僕の中では民藝とデザインに寸分のズレもない」と答えるが、その意図するところもまた、ふたつの「用」にかかわる。

民藝は生活道具で、道具はまず使い勝手のよさがあり、そこに美しさが揃って合格だという感じがある。でも僕は、ここ「日本民藝館」にあるものを見て、その上にたちのぼる何かを強く感じたんです。

使い勝手がよいものを機能性としての「用」とすることに異存はないだろう。とすれば、そこに付加される美しさは、もうひとつの「用」である「心になさう」ものといえる。深澤さんもまた、ふた

つの「用」を見据えている。しかも、「その上にあのぼる何か」つまり、ふたつのさらに先あるいは両者の根っこを見ている。

この「何か」を深澤さんは「愛着、えも言われぬ魅力」だという。僕はそれを「いとおしさ」ということばのもとに追究してきた(『民藝のインテリマシー』、二〇一五)。物への愛着やいとおしさとは何なのか。民藝とデザイン、民藝とアート、それぞれの境界を解く鍵は、この問いのなかにあると思う次第である。

# わたしはアーティスト

おがた 緒方しらべ

日本学術振興会特別研究員(九州大学)、民博外来研究員

アートと西洋美術界

何をアートとするのか。これまで言われてきたように、それをもっとも強力に決定づけているのは西洋美術界(アートワールド)という制度である。それは西洋だけのことではない。二〇一五年、ナイジェリア在住のガーナ人アーティスト、エル・アナツイは、西洋美術界でもっとも古い歴史と格式を誇るヴェネツィア・ビエンナーレで栄誉金獅子賞を

受賞し、「世界のトップ」まで昇りつめた。アナツイが「アフリカでもっとも成功しているアーティスト」として称讃されていることからわかるように、西洋美術界におけるア

トというものは、つまりアートの制度的な影響力は非西洋においても確かに大きい。

しかし、つくり手、買い手、支援者、批評家など、制度におけるさまざまな個人がアートについて多様



請け負う仕事内容を記載したアーティストの店の看板(ナイジェリア、イレ・イフェ市。2014年)



## 植物画の境界

むらやま まこと 美術作家  
村山 誠



Commelina communis L. (ツククサ) の写真



フリージアのスケッチ。植物の解剖や観察、写真の撮影、スケッチを経て、デジタルによる作品制作に移行する



さまざまな植物の解剖写真

な見解をもっていることもまた事実である。それならば、「わたしはアーティスト」だと自称している人たちが何をアートだと考えているのかについて探ってみれば、アートなるものについて何かを知る糸口が見つかるかもしれない。

境界は存在しない。

ナイジェリア南西部の地方都市でアーティストとされる人たちは、絵画、彫刻、看板・横断幕、記念額や飾り板、グリーティングカード等をアートとして認識している。アーティストはみなこうした作品の制作と販売によって現金収入を得ており、彼らのほとんどがその収入で生計を立てている。つまりアートとは、アーティストによって制作され、販売されるものである。日本や欧米では図画工作やグラフィックデザイン、印刷業務の範疇に入るような記念品や贈り物、日用品や広告・宣伝も、市民に身近なアートとなっている。

そのアートの多くは「雑」だったり、「クオリティの低いもの」だったり、他の作品の「コピーのような」ものだったり、やはり、わたしたちの知る画廊や美術館で目にするものとはどこか違うように思える。ナ



アーティストの店。絵画や飾り板が店頭に掲げられている(ナイジェリア、イレ・イフェ市。2014年)



アーティストの店内に掲げられた商品としての飾り板(ナイジェリア、イレ・イフェ市。2014年)

イジェリアの地方都市で誇りをもって作品を制作し、それを販売し、それによって生活をしている人が大勢いることに目を向ければ、何がアートで何がアートではないのかなんて、わからなくなってしまう。

しかし、生産・販売・流通という、アートが生まれ、享受される過程のどこかで必ず、彼らのアートもまた西洋美術界と関係している。アーティストたちは中学・高校や大学で正規の美術教育を受けたり、西洋美術の技法を積極的に取り入れたり、欧米人の顧客がいたり、欧米の美術市場から支援や刺激を与えられていたりする。この意味で、わたしたちの知っているアートと違うように見え、西洋美術界からはアートと認識されていないとしても、彼らのアートと西洋美術界のアートは互いにまったく異なる基準で成立しているわけではない。西洋美術界が、アフリカの都市で「わたしはアーティスト」であるという人たちのアートを包摂していかなくても、アーティストにとって西洋美術界は彼らの一部となっている。少なくともそこには、どれが西洋のアートでどれがアフリカのアートかという境界は存在しないのである。

### 「科学」と「芸術」の狭間で

タイトルにある「植物画」、この単語を聞いてどのようなイメージを思い浮かべるだろうか？ 静物画に見られるフランドル地方の「花卉画」か、印象派絵画で人気のあるモネの「睡蓮」やゴッホの「ヒマワリ」だろうか。はたまた、尾形光琳筆の国宝「燕子花図」か。わたしの場合、真っ先に思い浮かぶのは、一八世紀にベルギーやフランスなどで活躍したルドウテのバラ図譜に収録されている「ロサ・ケンティフォリア」だろう。これは、「ポタニカルアート」とよばれる、いわゆる博物画の一種である。おそらく、少しでもポタニカルアートを「存知であれば、「植物画」＝「ポタニカルアート」と結びつくと（勝手に）思っているのだが、では、先述の植物が描かれた絵と、ポタニカルアートは何が異なるか？

「ポタニカルアート」、そのままの訳は、「植物学の芸術」となるが、もう少し丁寧に説明すると、「科学的」（植物学的）に正しく描かれていて、同定・保存のための資料となり、なおかつ、「芸術的」に美しく植物の様が示されている植物図像。これが一般的な「ポタニカルアート」像である。

元々は解説図として、対象物の性質や形態の特徴を正確に広め伝えることをおもな役割としていたが、技術の発展とともにその役割は薄れ、代わりにその精確で写実的な描写が着目されるようになり、いわゆるフラインアートとは異なる独特のジャンルを形成するに至った。つまり、ポタニカルアートは「科学」と「芸術」の狭間でセッセとその独特な魅力を研ぎ澄ましてきたのである。

### 観点の置き方

感覚的な「美」と理性的な「知」という異なる趣を同時に満たしてくれる、科学と芸術の融合画だ、なんて聞いたら誰でも好奇心をそえられるに違いない。無論、わたしもその一員なのだが、わたしの場合はそれを楽しむだけでは飽き足らず、自分で作品なるものを作り始めたのである。元々、科学にも芸術にもまったく興味も関心もなかった人間が、ポタニカルアートという時空の狭間で見た感動に打ちのめ





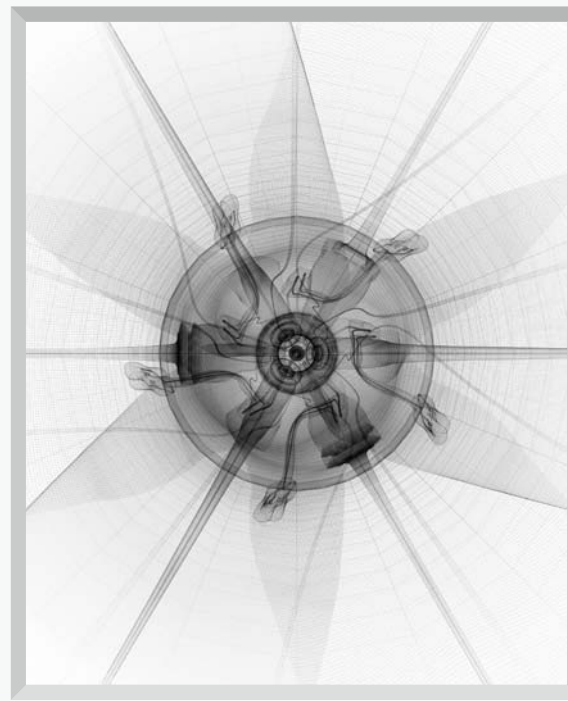
ジャコモ・パッラ「未来派男性服宣言」1914年  
出典：Radu Stern, *Against Fashion: Clothing as Art, 1850-1930*, Cambridge: London, The MIT Press, 2004, p. 33



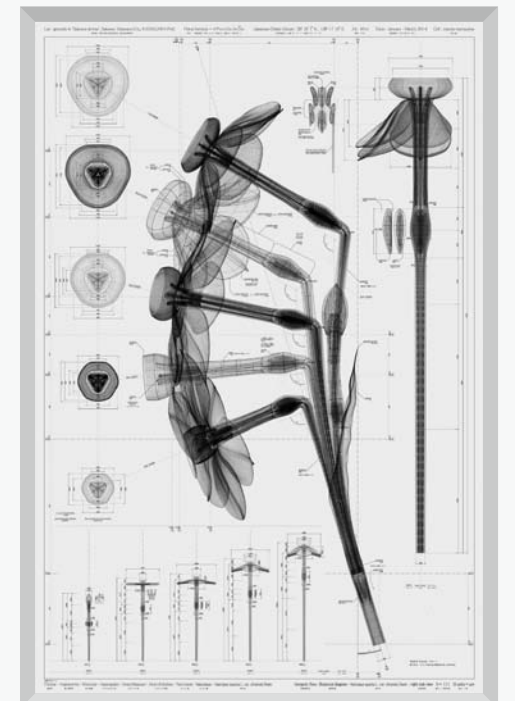
アンリ・ヴァン・ド・ヴェルド《街着》1901-02年  
出典：同左, p. 12 (元の出典は *Deutsche Kunst und Dekoration*, May 1902)

## ファッションと アートをめぐる 問い

あしだ ひろし  
蘆田 裕史 京都精華大学専任講師



村山誠《Japanese lily-iv-wc》2008年



村山誠《Narcissus tazetta L. var. chinensis M. Roem - right side view - ow》2014年

カテゴリーと地位  
「ファッションはアートなのか」。このような問いがしばしば立てられる。だが、不思議なことに「アートはファッションなのか」と問われることはない。それはなぜだろうか。  
ひとつには、アートがファッションの上位カテゴリーである（と考えられている）ことが挙げられよう。つまり、アートというカテゴリーが広範なものとしてあり、そのなかに複数のサブカテゴリー——絵画や彫刻、写真など——が存在するのである。そのうえで、ファッションがアートのサブカテゴリーとして認められるかどうか問われることとなる。  
もうひとつは、アートの方がファッションよりも地位が高いとみなされているからであろう。アートは高尚なものであり、ファッションは低俗なものだという昔ながらの考えである。古来、聖職者や思想家などさまざまな職業の人たちが、ファッションを軽薄で取るに足らないものだと糾弾してきたため、ファッションは文化的に低い地位にあるとされてきたのだ。  
ただし、そうした見解に異を唱えた人がいないわけではない。それが二〇世紀の美術家やデザイナーたちである。たとえば画家にして建築家のアンリ・ヴァン・ド・ヴェルドは「婦人服の芸術的向上」と題されたテキストにおいて、衣服が絵画や彫刻、あるいは応用芸術と同等の水準で扱われるべきであることを論じているし、イタリアの未来派はファッションに関する宣言をいくつも発表しただけでなく、ファッションを彼らの活動のなかでもきわめて重要なジャンルだと考えていた。

され、あれよあれよという間にのめり込んでいく様子は、自分のことながらとても奇妙な出来事に思えた。これは、今改めて考えると、ポタニカルアートには「科学」という後ろ盾があったから、わたしの琴線に触れたのだと思う。何か得体の知れない「芸術」というモノを、「科学」という確かなフィルターを通して、わたしは初めてその素晴らしさを認識できたのである。

### 植物の「美」を求めて

さて、そんな植物解体マニアがサイエンスとアートの境界について今考えていること。それは、サイエンスとは「知る」ということ、アートとは「生」む、ということだ。もちろん、科学者がアーティストックなことをおこなうこともある。その逆も当然ある。科学者が新しい発見から何かを生み出す行為はさながらアートだろう、芸術家があらたな美の概念を探求する様はまるでサイエンティストだ、と思うのだ。

わたしの場合は、アーティストとして過去の科学者（ここでは植物学者や植物画家）の手法や考え方をヒントに、「植物画表現」や「植物美」の可能性を追求・創造する、という立場だ。現状ではわたしの作品は、科学的な評価をされたわけではないので、ただの「アート」に過ぎない。しかし、最終的には科学的であり（植物学に有用で）、芸術的である（ビジュアルな美しさ・コンテクストの緻密さ）、まさしく「ポタニカルアート」にまで昇華させることを、密かに目的にしている。

ただし、ここでの「美」はこれまでのポタニカルアートとは異なり、外見上のものではない。植物の外側と内側の境界に潜む構造や機能を、本質的な「美」として提示することで、ユニークな植物画が完成するはずなのだ。

### 展示されるファッション

本来、ファッションはデザインの一分野であるため、「ファッションはアートなのか」という問い自体が不毛なものである。だが、日本においてこの不毛な問いがまだに立てられ続けているのは、ファッションとアートの関係をきちんと検討してこなかったことがひとつの原因であろう。しかも、その際に重要なのは学術書や学術論文の類ではなく「展覧会」である。一般に向けられた展覧会というメディアこそが、広く議論を共有するための契機となるからだ。

一九八〇年代以降、欧米諸国では「二〇世紀のファッションとアートの関係史」をテーマとした展覧会が少なからずおこなわれてきた。だが、日本ではこの種の展覧会がおこなわれていないのだ。唯一「ファッションとアート」をテーマにした展覧会として、京都服飾文化研究財団と京都国立近代美術館の共催による「身体」の夢」を挙げる事ができるが、この展覧会では現代美術のみが扱われ、歴史的な文脈は考慮されていなかった。近代を乗り越えていきなり現代に跳ぶという行為はあまり褒められたものではないはずだ。まず求められるべきは、歴史をきちんと押さえることである。

現在、美術館でファッションの展覧会がおこなわれることは珍しくない。だが、ファッションはアートではないとするならば、そもそも美術館でファッションを展示することは適切なのだろうか。そうした根本的な問いについて考えるためにも、アートとファッションの関係は早急に検証されるべきであろう。



# 「ケンカ」のすすめ

あさくら としお 朝倉 敏夫 民博 民族社会研究部



日本語教師をしてみました

写真：1982年3月、全南大学校師範大学日本語教育科の教授、1期生、2期生が、わたしの送別のために感謝牌をくれた。タイトルは「一杯の酒」



全南大学校の建物。かつてはこの建物が大学本部であった。2015年12月11日に光州市に行く機会があり、久しぶりに訪ねてみた

韓国・光州市



フィールドで信頼関係を取り結び、道を切り開くものは何か。この3月に定年を迎えるにあたって、わたしの韓国研究のはじめをふりかえてみた。

## 「どっちが早いかケンカしよう」

フィールドワークには現地語の習得が不可欠である。わたしは韓国でフィールドワークをするため、一九七九年の夏から六カ月間、延世大学校語学堂とソウル大学校語学研究所で韓国語を学んだ。ひととおり韓国語を話せるようになり、翌年、韓国政府の奨学金を得ることができ、一〇月から光州市にある全南大学校に留学した。そのとき、外国人教授宿舎への入居を条件として、師範大学で日本語の講師を引き受けることにした。

当時、師範大学の日本語教育学科は設立されたばかりで、一期生九人の日本語会話と時事日本語という科目を教えることになった。わたしは最初の授業で、「わたしが韓国語がうまくなるのと、君たちが日本語がうまくなるのと、どっちが早いかケンカしよう」とアジった。

## 光州での日々

一九八〇年は五月八日に光州事件があり、大学にもまだ殺伐とした雰囲気が残っていた。わたしは日本語会話の時間教室でおこなう必要もないうらと、大学の裏にあるブドウ畑に出て行って授業をおこなった。またソウルに行ったときには、日本公報文化院から日本文化を紹介するビデオを借りてきた。ところが師範大学には、それを見るための映写機がない。そこで映写機をもつと聞いた工科大学やアメリカ文化院に頼んだが、いずれも断られた。最後はケンカ腰で教育委員会に向き、師範大学の学生は将来日本語教師となる予定なのだから、なんとか映写する場所を貸してほしいと交渉した。

日本からの観光客は、ソウルから慶州、釜山に行くのが定番のコースであり、光州に来る日本人はめずらしかつた。学生たちはわたしの日本語はわかるようになったものの、他の日本人に自分たちのことが通じるのか、不安に思っているようであった。日本から知り合いが韓国に来ることがわかると、光州までぜひ足を伸ばしてほしいと頼んだ。

授業を離れても、光州からバスで一時間半かけて全州市に行き、夜通し酒を飲み、翌朝ヘージャンスル(迎え酒)を飲み、それから旅人宿に泊まり、お昼に全州ビビンバプを食べて帰る全州一泊ツアーや、女子学生がお母さんの漬けたキムチをもつてきてくれると、週末に学生を呼んでキムチチゲパーティーを開いたりもした。また、学生たちに連れられてマッコリディスコに行き、韓国の人たちによく知られていた「ブルーライト・ヨコハマ」を舞台で唄わされた。

## 道を切り開くものは

三〇歳になる前のわたしは、まだ青二才であり、破天荒な教師であった。全南大学校のような地方大学ではなく、ソウルの大学に移りたいと学生の前で露骨に話す教師ともケンカをした。自分勝手な正義感をふりかざし、ケンカをうっていた。

ソウルの語学学校で習った韓国語は、あくまで美しい韓国語であった。光州に来て、学生たちとつきあうなかで、いろいろなシチュエーションでの会話をすることができた。ことに、さまざまな場面でのケンカが、わたしの韓国語の習得にとって、どれだけ役にたったかわからない。彼ら学生にとつてわたしはあまりよい教師ではなかったと思うが、わたしにとって彼らは最高の教師であった。今思えば、申し訳ない話であるが、そのためもあってか最初に彼らにアジったケンカは、わたしの勝ちになったような気がする。

八二年の三月まで、全南大学校に一年半留学するなかで、わたしは韓国の都草島という島でフィールドワークをおこなった。そこでの暮らしについては、最近刊行した『コリアン社会の変貌と越境』(臨川書店)にまとめたが、全南大学校での思い出はそれにも増してなつかしい。日本語教師をさせていただいたおかげで、今でも当時の学生たちとのつきあいは続いており、その学生の弟子や仲間までも、わたしが光州市に行くのを歓迎してくれている。



2010年12月4日、光州市の飲み屋に、かつての教え子たちがわたしの還暦を祝って集まってくれた



展示リニューアルのお知らせ  
中央・北アジア及びアイヌの文化展示  
が3月17日(木)に新オープン

特別展

「夷酋列像」

蝦夷地イメージをめぐる人物・世界」  
《夷酋列像》は、1789年「クナシリ・メナシの戦い」で松前藩に協力したアイヌの有力者12人を描いた肖像画です。  
本展示では、「夷酋列像」を近世絵画史のなかでとらえるとともに、18世紀におけるアイヌの事情やアイヌ文化の背景に隠された中国やロシアを含めた北東アジアと蝦夷地の知られざる歴史・文化を明らかにします。



《夷酋列像》ツキノエ(フランス・プザンソン美術者古博物館蔵)

会期 5月10日(火)まで  
会場 特別展示館

みんなく映画会  
「サントラの週末」  
突然の解雇を告げられた女性が、最後の猶予に賭けて奔走する週末を通して、様々な立場に立つ労働者と人間同士の信頼について考えます。  
日時 3月20日(日) 13時30分～16時  
(開場13時)  
会場 本館講堂(定員450名)  
※申込不要、要展示観覧券、11時から本館2階観覧券売場にて整理券を配布

国際シンポジウム  
「無形文化遺産の継承における「オーセンティックな変更・変容」」  
3月11日(金)～13日(日)  
会場 本館第4セミナー室(定員60名)  
使用言語 英語(日本語同時通訳)  
※事前申込、参加無料、先着順

みんなくミュージアムパートナーズ  
「点字体験ワークショップ」  
日時 3月12日(土) 12時～15時30分  
会場 本館エントランスホール  
※申込不要、参加無料

公開講演会  
「ワールドアートの最前線——アイヌの文様とエチオピアの響き」  
アート(芸術)概念自体を問い直すワールドアートの動向について、国、地域や製作者の状況などの違いに注目しつつ、紹介していきます。

日時 3月25日(金) 18時30分～20時45分  
会場 オールホール(大阪市北区梅田)  
定員480名  
主催 国立民族学博物館・毎日新聞社  
※事前申込、参加無料、手話通訳あり  
お申込み・お問い合わせ  
本館 研究協力係  
電話 06・6878・8209

みんなくセミナー

時間 13時30分～15時(13時開場)  
会場 本館講堂  
定員 450名(当日先着順)  
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)  
第454回 3月19日(土)

「夷酋列像」の首長たちがまとう衣装  
講師 佐々木史郎(本館教授)



クナシリ・メナシの戦いの終結に関係した12人のアイヌの首長たちを描いた夷酋列像。その首長たちが身にまとう衣装は、ロシアの海軍士官の外套や蝦夷錦の朝服などアイヌの伝統的な衣服ではないといわれています。その衣装が語る当時の蝦夷地をめぐる日本、ロシア、そしてアイヌの人びとの葛藤を明らかにします。

みんなくウィークエンド・サロン

本館の研究者が来館された皆様の前に登場します！  
「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

3月6日(日) 14時30分～15時30分 特別展示館  
夷酋列像をめぐる、人物、世界  
話者 日高真吾(本館准教授)  
3月27日(日) 14時30分～15時30分 本館ナビひろば  
ノースコミュニティと共に進む博物館資料の熟識調査  
話者 伊藤敦規(本館准教授)  
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

カレッジシアター  
「地球探究紀行」  
みんなくの研究が驚きと感動をお届けします。世界の文化の奥深くへ一緒にどうぞ。  
時間 13時～14時30分  
会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」  
※事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回1000円(定員各回50名)  
共催 産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9  
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団  
3月9日(水)

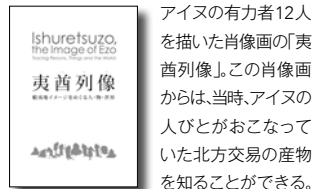
中国鶴岡い探訪記  
消えゆく前にみてみよう  
講師 卯田宗平(本館准教授)  
3月23日(水)  
ダンジリの系譜  
講師 笹原亮二(本館教授)  
お申込み・お問い合わせ先  
ウエブ産経カレッジシアター係  
06・6633・9087

●展示場閉鎖のお知らせ  
設備工事のため、各展示場を次のとおり閉鎖します。  
南アジア 2月24日(水)～3月2日(水)  
日本の文化 3月2日(水)～3月9日(水)  
東南アジア 3月9日(水)～3月16日(水)

●無料観覧日のお知らせ  
3月13日(日)は万博公園ふれあいの日のため本館展示を無料で観覧いただけます。  
●みんなくシャトルバスのご案内  
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間の直通送迎バスを期間限定で運行します。  
運行日 5月10日(火)まで  
1日11往復、所要時間10分、無料  
運休日 休館日  
3月5日(土)、6日(日)、13日(日)  
※万博記念公園でイベント開催の場合は臨時に運休することがあります。

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。  
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

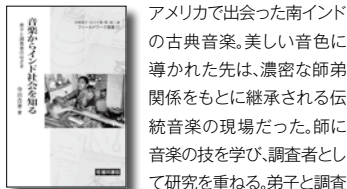
■北海道博物館 編  
「夷酋列像——蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」  
「夷酋列像」展実行委員会、北海道新聞社 1,852円(税抜)



アイヌの有力者12人を描いた肖像画の「夷酋列像」。この肖像画からは、当時、アイヌの人びとがおこなっていた北方交易の産物を知ることができる。

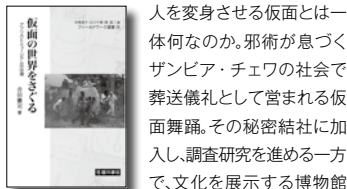
本書では、「夷酋列像」をめぐる人やものとの交流を描きながら、鎖国下の日本に与えた世界観を解き明かしていく。

■寺田吉孝 著  
「音楽からインド社会を知る——弟子と調査者のはざま」  
(フィールドワーク選書)  
臨川書店 2,000円(税抜)



アメリカで出会った南インドの古典音楽。美しい音色に導かれた先は、濃密な師弟関係をもとに継承される伝統音楽の現場だった。師に音楽の技を学び、調査者として研究を重ねる。弟子と調査者のはざまに揺れ動く心情をつづりながら、複雑なカースト社会に迫り、混沌とした南インドの音楽界を描き出す。——やがてくる師との別れに、弟子は何を想い、何を後代に伝えるのか。

刊行物紹介  
■吉田憲司 著  
「仮面の世界を探る——アフリカとミュージアムの往還」  
(フィールドワーク選書)  
臨川書店 2,000円(税抜)



人を変身させる仮面とは一体何なのか。邪術が息づくザンビア・チェワの社会で葬送儀礼として営まれる仮面舞踊。その秘密結社に加入し、調査研究を進める一方で、文化を展示する博物館のあり方を見据える。人びとの生活のなかで生まれ、育まれてきた仮面の魅力を伝えるとともに、人と人の関わりをなかで他者と自己を掘んでいくフィールドワークの意義を感じさせる一書。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716  
http://www.senri-f.or.jp/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

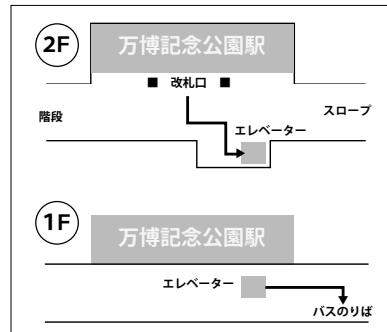
友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名)  
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円  
第453回 4月2日(土) 13時30分～15時30分  
「特別展「夷酋列像」関連」  
アイヌの衣服から見えてきたこと  
講師 吉本忍(本館名誉教授)  
みんなくで開催する特別展「夷酋列像 蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界」で展示されるアイヌの最古の衣服、その他の新発見資料を紹介しながら、これまでほとんど知られることなかった16世紀から17世紀におけるアイヌの積極的な対外活動の一端について解説します。  
〔月刊みんなく〕2月号に掲載の「アイヌの衣服から見えてきたこと」もご参照ください。  
●講義終了後、講師の案内のもと、特別展を見学します。  
第454回 5月7日(土) 13時30分～15時30分  
〔第87回民族学研修の旅関連〕  
国境の地に生きる——フィンランド・カレリアとエストニア・セトウの人びと  
講師 庄司博史(本館名誉教授)  
フィンランド東部・カレリア地方とエストニア東南部・セトウ地方にはともに国境によりロシア側と分断された人びとが住んでいます。双方ともロシアの長い支配下にあったため民俗文化や宗教にはロシアの強い影響を残す一方、辺境の地であったことからそれぞれの国ではすでに失われた文化も多く保持してきました。本講演では、今日、過疎化と多数派への同化の波のなかで地域にとどまり、伝統文化を守ろうとする人びとの姿を追います。  
●講義終了後、講師を囲んで懇談会を実施します。

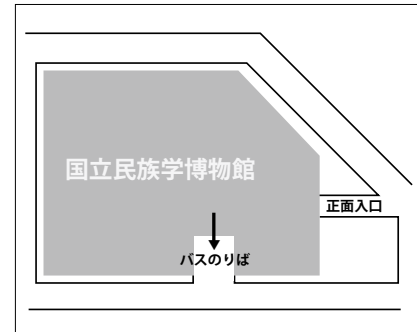
東京講演会  
会場 モンベル渋谷店5F(サロン)  
定員 60名(要事前申込、会員無料・一般500円)  
第115回 4月23日(土) 13時30分～15時30分  
〔第87回民族学研修の旅関連〕  
国境の地に生きる——フィンランド・カレリアとエストニア・セトウの人びと  
講師 庄司博史(本館名誉教授)  
第87回民族学研修の旅  
フィンランドとエストニアの原風景に出会う  
森の恵みと唄を愛する人びとを訪ねて  
8月1日(月)～8月9日(火)

大阪モノレール 万博記念公園駅発



時	万博記念公園	→国立民族学博物館
10	10	40
11	10	40
12		
13	00	30
14	00	40
15	10	40
16		15

国立民族学博物館発



時	国立民族学博物館	→万博記念公園
10		55
11		25
12		45
13	15	45
14	25	55
15		25
16	5	30



# 味の根っこ



インド、タミルナードゥの豆スープ

## サンバル

杉本 良男 民博 民族文化研究部



バナナの葉にカレーとご飯を盛り、サンバルをかける

ル・ランチと称して二〇品、三〇品もつく場合もある。まずはカレーの容器をお盆の外に出し、空いたスペースにご飯を盛ってもらう。また、バナナの葉の上にご飯やカレーをのせて出す店もある。

最初のご飯一盛りは、サンバルをかけて混ぜ、



ご飯のお代わり



野菜カレーのお代わり

### ダブルで「ホット」

インドの食といえはなんといっても日本語でカレー、現地ではカレーであろう。カレーといってもじつに千差万別で、共通するのはスパイスで味付けをした惣菜、ということにつきる。カレーはとにかく辛いと思われるであろうが、インドのマハーラーシュトラ州やグジャラート州などのカレーは辛さのなかにも甘さを感じる。逆に南インドのカレーは辛い。とくにアーンドラ・プラデーシュ州のカレーは辛く、またこの地域は気温も高い。どちらも「ホット」というのがオチである。

わたしの調査地のあるタミルナードゥ州のカレーは菜食が基本で、どちらかといえばスープ状で酸味が強いのが特徴である。その独特の味わいを演出しているのが「サンバル（サンバル）」である。これは日本のインド料理店でもみられる豆の皮をとり挽きわりにして煮込んだダールに、トマト味やタマリンドなどで酸味を加えたスープである。スパイスは、コリアンダー、クミン、コショウ、チリ、ターメリックなどを混ぜて作るが、最近では既製品のサンバル・パウダーも市販されている。基本の豆は、タミル語のトゥワラン・バルツプ（キマメの一種のトゥール豆）だが、ほかにレンズ豆、ヤナエリなども使われる。スープの具としてナス、大根、オクラなどを入れるが、とくに好まれるのは細長く硬い皮をもつムルンガ（ドラムスティック）である。

いっしょにカレーを何品か食べる。最初にチャパティー（パン）や極うすのせんべいのようなパッドがつくこともある。サンバルでひととおり食べおわると、名物のお代わり自由で、洗面器のような容器に入ったご飯や、バケツのような容器に入った野菜カレーをお代わりする。二盛りめはラツサムというやはりスパイス味のさらさらしたスープをかけて食べる。サンバルとちがってねばりがないので、手ですくうにはわざが必要で、うっかりするとお盆に広がっていく。バナナの葉で食べる時は外にこぼれないように器用に手ですくって食べる。そして三盛りめにはヨーグルトをかけて食べる。冷たいヨーグルトをご飯と混ぜて食べるのは少し違和感もある。ただ、こうして順に食べてくるとだんだん辛さが和らぎ、最後のヨーグルトで口のなかがすっきりする。

### アットホームな味

わたしにとっても、久しぶりのタミルナードゥの味は、なんといってもサンバルにつきる。最初にサンバルをご飯にかけて食べ始めると、背中をなにかが下がついていくような、不思議な感じに襲われる。サンバルは、料理の基本中の基本であるだけに、味のバリエーションもまた非常に多い。サンバルのレシピを公開しているあるホームページには、その幅広さ、奥深さから、サンバル科学の博士号を作ろうなどというジョークも載せられているほどだ。



パッドとご飯を盛る。盆の左上がサンバル



レストランの入口前におかれた「ミールス・レディ」の看板。タミル語（サーッパードゥ）と英語で併記されている

### ミールスの作法

タミルナードゥ州には町のいたるところに食堂があり、昼時になると「ミールス・レディ（昼食あります）」と書いた看板が出ている。「ミールス」とは、インド中に聞こえたお代わり自由の昼の定食である。定食は大きなお盆かバナナの葉にご飯やカレーを盛って提供される。大きなお盆には、ちいさな容器に入ったカレーやデザートなどが何品もついてくる。最初にこれを出されたとき、どれをどういう順序で食べるのか見当がつかなくて困った。なかにはスベシヤ

タミル人は、食事をご馳走になったとき、家で食べるようだ、というのが最上のほめ言葉である。それは、いわゆるおふくろの味にあたるのだが、家庭でいただくカレー料理は味がやさしくてとてもおいしい。外でも家でも、アットホームな気分をかもし出してくれるのは、サンバルなのである。

### サンバル

トゥールマメのダール	1/2カップ
タマネギ	1/2個
ニンニク	1かけ
ショウガ	1かけ
カブ	大2個
トマト	中1個
コリアンダーの葉（香菜）	少々
サンバル・パウダー	小さじ2
タマリンド・ペースト	小さじ1/2
サラダ油・塩	適量

- ① ダールを3カップの水でやわらかくなるまで、ことこと煮る。
- ② カブは1cmくらいの厚さに切っておく。
- ③ 厚鍋にサラダオイルを熱し、スライスしたタマネギ、みじん切りのニンニク、ショウガを、透き通るまで炒める。
- ④ ②を加えて炒める。
- ⑤ ①のダールを汁ごと加え、みじん切りトマト、サンバル・パウダー、タマリンド、塩を加え、野菜がやわらかくなるまでことこと煮る。
- ⑥ 全体が具だくさんのポタージュスープ風になったら、できあがり。
- ⑦ コリアンダーの葉を上に乗せて食卓へ。

※ 野菜はダイコン、ナス、ジャガイモなどなんでもいいが、具としてタマネギだけを入れたオニオン・サンバルが一番ポピュラーのようだ。

註) 辛島昇「インド・カレー紀行」(岩波ジュニア新書)2009年、62ページより。レシピは、最近亡くなられた辛島昇先生と長く共同研究をおこなってこられた、スッパラーヤル先生の奥様のもの。

# 文化遺産の「拡張」

## ——サンティアゴ巡礼路に描かれた矢印

どい きよみ  
土井 清美

青山学院女子短期大学兼任講師

近年、世界遺産委員会は、経路沿いに点在する複数の構成資産の登録（シリアル・ノミネーション）を奨励している。日本の熊野古道もその一例だ。サンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼路は、そうした動きより早くに登録され、今ではモデルになっている。

### 登録された「道」と徒歩巡礼の人気

スペイン北部に、聖ヤコブゆかりの町、サンティアゴ・デ・コンポステラがある。ここに至る道は「ヤコブの道」とよばれ、西欧各地を網目状に走り、スペイン国内にも同名のルートがいくつもある。なかでも、世界的にも珍しく「道」が世界文化遺産として西仏それぞれで登録されているのが、そこへ至る総延長約一〇〇〇キロメートルの巡礼路である。

近年、この非常に長い道のりをあえて徒歩や自転車ですべての町、サンティアゴまで目指す人が増えている。もっと楽に目的地サン



サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂

ティアゴに行く方法があるのに、徒歩で目指す彼らの多くは、「観光客」ではなく「巡礼者」であることを自認する反面、道中にある教会堂のミサに立ち寄り、そこにはほとんどいない。いかなる動機であれ、迷ったり立ち止まったりしながらの徒歩の旅が「遍歴する巡礼者」の意識をかたちづけている。

### 世界遺産委員会による対象範囲拡張

二〇一五年、世界遺産委員会



スペインにあるサンティアゴへと続く道

は、当該の巡礼路に他のルート（と建造物群）を追加した「拡張登録」を承認した。つまり、文化遺産として指定される範囲が広がったのである。今回の拡張決定までのプロセスでは、既存ルートの保全もままならない状況での拡張申請を反対する巡礼路愛好団体に対して、スペイン中央政府とバスク州政府の協力関係が拡張登録の決定打となったとされる。遺産登録の拡張をめぐる「会議場」ではさまざまなポリティクスが働いて

いる他方、「現場」ではどのような現象が起きているのだろうか。

### 増殖する矢印

家の扉、鉄塔、地面。巡礼路沿いのあちこちには落書きのよう黄色いペンキで記された矢印がある。こうした矢印は、巡礼路愛好団体などが書き、サンティアゴを目指して歩く巡礼者が進路の手がかりとしているものである。およそ三十分歩き続けてもこうした矢印をひとつも



矢印が土産物のモチーフになることも多い。写真はピンバッジ。標本番号 H0231178

見かけなければ、道を間違えたということになる。土産物店にはこの矢印をモチーフとしたTシャツやバッグなどが売られている。巡礼路を示す矢印は、それだけ巡礼者に頼りにされて親しまれているものなのだ。

今日、保全や後世への継承が目的であったはずの遺産登録が、経済的な資源に挿げ替えられるなど、「会議場」と「現場」の乖離が文化遺産政策において大きな問題となっている。しかし現場で表出する具体的なイメージと、そこから遊離する宿命にある制度的な方向性が、思わぬところで重なるという、ややジョークめいたこともまたあったりするのだ。



地面に書かれた黄色い矢印

路から少し逸れたところに店を

あ



## 孤高の歌姫 ——トルコのアレヴィーとして

「文化」の担い手を考えたとき、多数派・主流派のみが担うものなのかと言われれば、そうとも言い切れない。少数派によって連綿と受け継がれてきたものもあり、それがアイデンティティのよりどころになることもあるのだ。



アレヴィーの儀式で伝統的な衣装をまとったイェリッツ（撮影・寺田吉孝）

### 民謡好きの理由

トルコ第一の都市イスタンブールに、トルコでもっとも入学が困難な音楽大学がある。イェリッツはこの大学の民謡科に入学するために、毎日練習と民謡酒場で歌うアルバイトに励んでいた。アルバイトは週に五日、夕方五時に店に入り、終わるのは夜中の二時過ぎだ。彼女の母親はよくわたしに、「心配で仕方がないから本当は辞めてほしい。大学もいいが、それより早く結婚して落ち着いてほしい」と嘆いていた。二〇〇四年当時、結婚せず一人で長期間トルコに滞在していたわたしは、心配する母親に何も答えることができないうでいた。

イェリッツはわたしと知り合った時点で、すでに四回その音楽大学を受験していた。民謡酒場の前は、高校卒業後すぐにホテルの給仕として働き、毎日民謡を聴いて自分なりに勉強していた。そこまで民謡を好きなことに日本人のわたしは感心していたのだが、その理由のひとつは彼女のバックグラウンドにあった。彼女はトルコの宗教的マイノリティとして知られるアレヴィーだったのである。



儀式のなかでセマーを実践するイェリッツ

### アレヴィーと民謡

アレヴィーと民謡（トゥルクユ）は切っても切れない関係である。アレヴィーは、自分たちをムスリムと称することが多いが、欠かすことのできない儀式であるジェムを、日本の三味線に似た民俗楽器パーラムの伴奏する歌によって進行する。ジェムは男女一緒におこなわれ、さまざまな要素からなり最後には「見「舞踊」」とも見受けられる身体動作もおこなう。これらのことが影響し、宗教儀礼のなかでの音楽や舞踊の使用にあまり好意的ではないスンニー派のムスリムが人口の多数を占めるトルコにおいて、常に異端として迫害を受けてきた。

儀式ジェムで詠われる歌の多くは、アレヴィーが信仰してきた聖者たちの残した詩に節をつけたものである。そのなかから宗教的意味の薄い歌が、トルコ民謡として知られるようになった。それは、かつてトルコに多く

存在し、村々を歌いながら歩き回り情報を伝達する役割を果たしていた吟遊詩人（アーシユク）の九〇パーセント近くがアレヴィーだったからである。村人たちは知らず知らずアレヴィーの歌を知ることになり、それは次第に国中に広がっていった。したがってトルコ共和国建国当時、地域の文化を収集しあらたなトルコ文化を創出することを目的に各地に作られた民衆の家（ハルク・エヴィ）で、伝統文化（民謡）の担い手としてアレヴィーが集められ活躍することとなった。上記の理由から最近まで公表することは少なかつたが、現在でもメディアで活躍する民謡歌手の多くはアレヴィーである。

### アレヴィーとして！歌手として！

そのようなバックグラウンドをもっていたイェリッツは、都市化のなかで薄れていくアレヴィー文化を特に危惧していた。五回目の受験をパスした後、大学に通いながらイスタンブールに多くあるアレヴィーが信仰する聖者の文化の保存を目的としたアレヴィー文化協会の青年部主要メンバーとして活動した。さらに前述の儀式のなかで実践されるセマーとよばれる身体動作の担い手として、アレヴィーへの誤解がトルコ社会のなかで徐々に払拭されるにたがって増加してい

く公演に出演していた。大学院に進んだ彼女は、アレ



デビューアルバムのコンサートのポスター

ヴィー音楽（旋律や詩）についてのシンポジウムを大学や協会主催として企画し、また、アレヴィー系ラジオ局でも歌手兼MCとしてアルバイトをし、ゲストにイスラーム神秘主義教団メヴレヴィー教団の長老を招いて宗教音楽についての対談をするなど、積極的に宗教音楽についての話題提供をおこなっている。音楽を専攻するアレヴィーの学生として、マイノリティとされてきたアレヴィーがいかにかこの国の文化に影響を与えたか、直接的・間接的に訴えているのである。その一方、純粋に民謡歌手として活躍したいところから夢見ていた彼女は、現在ではCDデビューを果たし、多くのテレビ番組に民謡歌手として出演している。

トルコにアレヴィーとして生まれた彼女は、都会の生活のなかで忘れがちな自分がアレヴィーであるというアイデンティティを維持しながら、血のにじむような努力をし夢を着実に実現させている。

二〇一五年のノーベル医学生理学賞は、イベルメクチンの開発に関わったウィリアム・C・キャンベルと大村智、それにアルテミシニンを発見した屠呦呦<sup>トウヨウヨウ</sup>に授与された。イベルメクチンは河川盲目症と呼ばれる熱帯病をほとんど完全に予防できている。知られており、毎年二億人以上の人に無償で投与されている。アルテミシニンはマラリアの治療薬の原型となった化学物質で、二〇一三年にはそれに由来する薬剤が延べ四億人弱の人に投与された。

年間二億人、四億人という数字が並ぶと、確かに、これらの薬剤にはノーベル賞が授与されるだけの価値があるように思える。しかし、なぜこのタイミングでの受賞となったのだろうか。イベルメクチンが開発されたのは一九八〇年代初頭のことだし、アルテミシニンが発見されたのは一九七〇年代のことである。どちらも、二〇一二年に山中伸弥が受賞したiPS細胞のように広範な応用可能性を持っているわけではない。

受賞の理由として、ノーベル財団はグローバルヘルスへの貢献を挙げている。グローバルヘルスとは、人道主義的な立場から、先進国だけではなく全世界の人びとの健康を増進しようという医療のことで、二〇〇〇年代後半以降、欧米の医学界でにわかブームとなっている。日本では、致死的な病気といえどガンや心臓病、脳梗塞が想像されるかもしれない。しかし世界に目を向ければ、とりわけ開発途上国においては、マラリア、結核、

## グローバルヘルス Global Health

はま だ あきのり  
浜田 明範 民博 機関研究員

ノーベル賞の  
メッセージ  
人間学の  
キーワード

HIV/AIDSといった感染症が依然として猛威を振るっている。そうであるならば、それらの病気の治療に対する貢献も等しく表彰されなければならない。

この意味で、イベルメクチンの開発に賞が贈られたことは大きな意味をもっている。それによつて予防される河川盲目症という病気について、知っていた人はそれほど多くはないだろう。河川盲目症は、「顧みられない熱帯病」のひとつに数えられ、危険性が高いにもかかわらず無視されてきた感染症とされている。このような特徴を持つ病気の治療法の開発にノーベル賞を授与することからは、「これまで無視されてきた感染症をこれからは無視しない」という強い政治的メッセージが透けて見える。近年、グローバルヘルスに注目が集まっている背景には、ビル&メリンダ・ゲイツ夫妻の出資したゲイツ財団による積極的な支援がある。ただし、ゲイツ財団は、単に資金を援助しているだけではない。助成したプロジェクトに説明責任を強く求めている。その結果、プロジェクトの成功を証明するための証拠として、統計学的な手法に基づいて算出された指標が用いられるようになってきている。この意味で、グローバルヘルスは、治療と研究、人道主義と成果主義が融合しているという特徴をもっている。グローバルヘルスは、人びとの健康状態を改善し、また、対象となる人びとの現状を可視化するという二重の意味で、まさに地球規模で人間の生を統治する場となっているのである。



## 編集後記

エキスポシティに昨年11月にオープンしたニフレルに取材に行ってきました。

「アートとして魚を展示する」というのがこれまでの水族館にはない新しいコンセプトのひとつで、正面からだけでなく、周囲180度、真上から、そして下からも、水の生き物の色や形をじっくり味わえるようになっている。水槽（というよりショウケース）や照明なども洒落ていて、まさにギャラリーのインスタレーションである。オウムガイの殻の対数螺旋やヒトデの五放射相称など、自然界が無作為に生み出す形や色は、人間が「術」を尽くして造り出す芸術のお手本になってきたので、アーティストックなのは至極当然なのである。

ニフレルには「ワンダーモーメント」という、魚が一匹もいない、アートそのものの空間もある。頭上に浮く球体とその下の床面に松尾高弘氏が手掛けたメディアアートが展開する。その神秘的な光と音の共演に合わせて、小さな子どもたちが自由に踊りまくっていた。瞬き、仄めく光線を浴びながら、鑑賞物としてのアートの境界をいともたやすく超えて、作品のムーヴメントと一体になっているのである。光の海をひらひらと遊泳する熱帯魚のようで、見ていて飽きない。(山中由里子)

●表紙:村山誠「Narcissus tazetta L. var. chinensis M.Roem - left side view - b」  
2014年

### 次号の予告

特集

## 体育会系

## 月刊みんぱく 2016年3月号

第40巻第3号通巻第462号 2016年3月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信  
編集委員 山中由里子(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子  
丹羽典生 丸川雄三 南真木人 吉岡乾

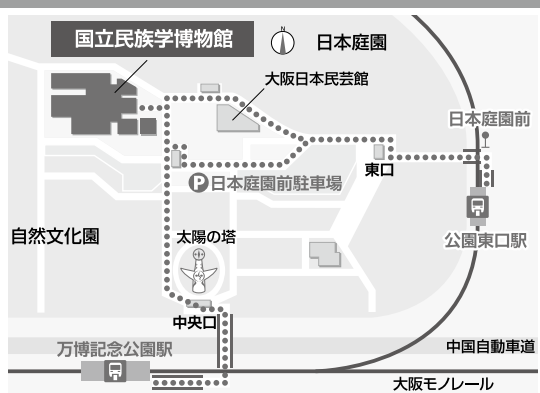
デザイン 宮谷一孝 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に  
お願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

# みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

「生きものさがし」にお越しく下さい。

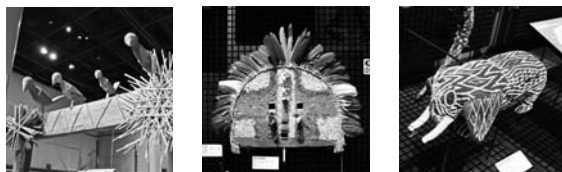
国立民族学博物館とニフレル（株式会社海遊館）、  
連携協力協定を締結

昨年11月、万博記念公園駅前の大型複合施設エキスポシティに、生きているミュージアム「ニフレル」がオープンしました。「感性にふれる」をコンセプトとするミュージアムです。色や姿、適応する環境など7つにわけられたゾーンでは、生きものの魅力をたっぷりと感ずることが出来ます。お子さんはもちろん、大人も生きものにふれたときの純粋な驚きや感動を再び体験できるような仕掛けがなされています。

このたび、みんなぱくとニフレル（株式会社海遊館）は、連携協力協定を締結しました。年末年始展示イベント「さる」に関連して、1月11日（月・祝）におこなわれたトークイベント「みんなぱく×ニフレル——人と生き物をつなぐ」は、その締結とニフレルの開館を記念したものであります。

みんなぱくには生きものそのものはいませんが、毛皮や羽根などを素材としたものや狩猟・牧畜の道具、そして生きものから相を得て作り出した仮面や像など、人と生きものとのかかわりを示す資料が多数展示されています。

「みんなぱく×ニフレル」の様相。まずニフレルの小畑洋館長（中央）とみんなぱくの池谷和信教授（左）による、人と生きものとの関係についての講演があり、その後みんなぱくの上羽陽子准教授（右）の司会により、小畑館長と池谷教授の対談がおこなわれました



みんなぱくの展示には、生きものをかたどったものや、生きものを素材にしたものがいっぱいあります。それぞれの展示場で視線を上にとさがしてみてください



ニフレルの「うごきにふれる」ゾーン。ワオキツネザルやカピバラが気ままに通路を横切り、鳥たちが飛び回ります。ここでは来館者よりも生きものが主役のようです

人が生きものとかかわりながら生みだした造形物を展示するみんなぱくと、生き物の特性に焦点をあてた展示をするニフレル、一見手法も視点も異なるようですが、このふたつのミュージアムが連携協力することで、あらたな知的創造がおこなわれることが期待されます。また、万博記念公園は、1970年の万博開催後に「緑に包まれた文化公園」として整備されました。植栽から40年以上たち、大きな森ができあがったこの公園は、みんなぱくに加えてニフレルがオープンしたことで、わたしたちと生きものとの関係を今一度見直し、理解を深めるためのよりよい場所となったのではないのでしょうか。「生きものさがし」は万博記念公園にぜひお越しく下さい。

## みんなぱくをもっと楽しみたい人のために————— 会員制度のご案内

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。電話06-6877-8893（平日9:00～17:00）

### 国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

### みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

### 国立民族学博物館 キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。